

## 第六章 エミリアの話

美しい若い女性はがらんとした部屋に立ち、死んだ男の体を悲しそうに見た。

そして彼女は、私たちが黒い瞳で見つめた。

「でもあなた方！ あなた方は警察官なのでしょう？」と彼女は尋ねた。

「ええ、私たちは警察官です」とグレグスンが言った。

彼女は暗い部屋を見回した。

「でもそれなら、ジェンナーロはどこにいらっしゃるのでしょうか？」と彼女は尋ねた。

「ジェンナーロ・ルッカは私の夫です。私はエミリア・ルッカと申しまして、私たちはニューヨークから来ました。ジェンナーロはどこですか？ 夫はたった今この窓から私を呼びました、それで私はここに駆けて来たのです」

「私があなたを呼んだのですよ」とホームズが言った。

「あなたが！ どうやって私を呼ぶことができたのでしょうか？」とエミリア・ルッカは尋ねた。

「あなたたちの暗号は難しくありませんでした」とホームズは言った。

「私たちは、ここにあなたが必要だったのです、だから私は窓で『vieni (来い)』と点滅させました」

美しいイタリア人の女性は驚いてホームズを見た。

「どのようにしてあなた方がこれらのことを知ったのか、私には分かりません」と彼女は言った。

「ジュゼッペ・ゴルジアーノ—彼はどうして—」

彼女は黙り、そして突然言った。

「やっと分かったわ！ ジェンナーロがこの怪物を力強い手で殺したのね」

「ええと、ルッカ夫人」とグレグスンが彼女の腕に自分の手を置いて言った。

「私にはあなたが誰で、どんな人なのかよく分かっていません。ですが、あなたはこの事件についてよく知っていますね。私と一緒にスコットランドヤードに来てください」

「ちょっと待ってください、グレグスンさん」とホームズが言った。

「この女性には、私たちに伝えるべき重要なことがいくつかあるのだと私は思いますよ」

ホームズはルッカ夫人の方を向き、「あなたの夫はこの男を殺した罪で逮捕されるでしょう。ジェンナーロさんがしたことはとても間違っています。このことは分かかりますか？」

「もう今やゴルジアーノは死んでいるのだし、私たちが恐れるものは何ともありません」とルッカ夫人は言った。

「彼は恐ろしい怪物でした。でもジェンナーロが間違ったことをしたとは分かっています。殺すことはいつだって間違ったことなのです」

彼女は少しの間黙り込み、彼女の黒い瞳は悲しげだった。

「もし私が一部始終をお伝えしたら、あなた方はなぜ私の夫が彼を殺したのかきっとお分かりになるでしょう」

「よろしい」とホームズは言った。

「このドアを開けて、すべてここに残していきましょう。私たちはこの女性と彼女の部屋へ行って、話を聞けばよいでしょう」

私たちは皆、ウォーレン夫人の家へ戻った。

30分後、私たちはルッカ夫人の小さな居間に座っていた。

彼女は私たちに、彼女の尋常でない話を話し始めた。

彼女はとても速く話したが、彼女の英語は上手ではなかった。

「私はイタリアのナポリ市のそばのポシリッポで生まれました」と彼女は言った。

「私は有力者であるアウグスト・バレリの娘です。ジェンナーロは私の父のために働き、私は彼を愛しました。彼は貧しかったのですが、美しく優しい人でした。私の父が彼との結婚を許さなかったもので、私たちは一緒に逃げました。私たちは別の都市で結婚したのです。そして、私はアメリカへ行くお金を得るために、自分の宝石を売りました。私たちは4年前にニューヨーク市へ行き、そこで暮らしました。ニューヨークにはイタリア人が多く、私たちは気に入りました」

「最初は全てがうまくいきました。ジェンナーロはティト・カスタロッテさんというイタリア人紳士の手伝いをし、彼の親しい友人となりました。カスタロッテさんはニューヨークに大きな会社を持っていて、300人を超える人たちが彼のために働いています。彼はジェンナーロに会社の重要な仕事を与え、いつも親切にしてくれました。カスタロッテさんは結婚しておらず、ジェンナーロは彼にとって息子のような人でした。私たちは彼のことを父親のように愛しました。ジェンナーロと私はブルックリンに小さな家を借り、共に幸せでした」

「そしてある晩のこと、ジェンナーロはイタリア人の男性を家に連れてきました。彼の名前はジュゼッペ・ゴルジアーノとあって、彼もまたポシリッポの出身でした。お分かりの通り、彼はとても大きな男でした。彼についてのあらゆることが大きく恐ろしかったのです。彼の声は大きく、話すときはとても大きな腕をあちこちに動かしました。彼は私たちの小さな家には大きすぎました。彼は大きな、怒った声で話すのを決して止めませんでした。彼は私たちの家へ何度もやって来ました。ゴルジアーノが私たちの家にいるとき、ジェンナーロは不満でした。でも彼は座って、ゴルジアーノが話すことに耳を傾けました。彼はとても悪い男で、いつも怒っていました」

私たちは皆、ルッカ夫人の長い話をじっくりと聞いていた。

「私は何かがおかしいと分かっていました。私のかわいそうなジェンナーロはひどく彼を恐れていました。ある夜、ジェンナーロは彼の長い身の上話を私にして、私はとても悲しくなりました。ジェンナーロは若い頃は貧しく、世の中は夫にとって不利なものでした。夫は赤い輪と呼ばれるナポリの秘密結社の一員となりました。それは古いカルボナリ党の一部で、ひどいことをしていました。この秘密結社の党員は規則を守らねばならず、離党することはできませんでした」

「私たちがアメリカへ行ったとき、ナポリと赤い輪から遠く離れたので、ジェンナーロは幸せでした。夫はそのことを忘れたかったのです。ところがある晩、夫はニューヨークの赤い輪の党員に出会ってしまったのです。それがジュゼッペ・ゴルジアーノでした。彼は凶悪な殺人者だったので、イタリア南部では、人々は彼のことを『死神』と呼びました。イタリア警察が彼を逮捕したがっていたので、彼はニューヨークへ行きました。そして、新しい都市で彼は再び赤い輪を始めたのです」